

# 続・家族理解入門

## 家族の構造理解・応用編

2020/03/15 版

家族のことを書いてみると、時と共に変化していっている自分を感じる。洞察が深まったり、研究が深化しているのなら結構なことだが、どうもそうではない。

それは年齢と共に起きている変化のように思えてならない。つまり、老化現象である。徐々にではあっても、負担の大きいことを見なくなっている気がする。これは無意識にだが、積載可能重量に合わせて、見えるモノが変化していっているのではないだろうか？

大きな荷物を背負うのは苦しい。若い力業(チカラワザ)でなんとかしのげる時期も遠に過ぎた。だんだん賢明さで対応できるようでなければならぬ。無論そういう面もあるだろうが、何もかもにというわけにはいかない。

その結果、引き受けられるモノしか、見えなくなってきたのではないかと懸念するのである。だからすぐにどうこういうモノでもないが、世の中にある引退というのは、そういうことが個々人の中で深く関わっているのだろう。

## 第十回 パワー③ 「金」

### 金

お金が力を持っていることを否定する人はいないだろう。だから、「金がすべてではない！」という言い方も、常に学習させられてきた。

人は見かけではない、中味だというフレーズが、延々と語られてきたのと同様、慣用句で戒められているものが非常に強力であることは誰もが知っている。お金はそれくらいパワフルだということだ。

お金と幸福について語った言葉も世界中に溢れている。あれこれ調べたわけではないが、各国の金銭についての感覚も様々なようだ。

アメリカ人の金銭感覚やお金の教育話は時々耳にするし、機会の平等、結果の不平等がその結末だと言われる。誰にもチャンスのある国だという価値観をアメリカ人は大切にしている風だ。

しかし結果の自己責任を強調しすぎて、貧富の差が社会構造的な面が大きいのを問題にしにくいのを、たいした主張だとは思えない。そんな空気を

日本社会がまとい始めるのと併走しながら、私達は貧困を自分の能力の不足であるかのように感じる学習をさせられてきた。だから努力は「もっと金を！」の行動化に集約され、才能のない者は長時間働いて補填するしかないと思われてきた。

断言できるが、昔からそうだったことなどはない。ドンドンその傾向が強くなっていったのだ。そして結果的に、非正規雇用者が多くを占めることになり、平均賃金も時と共に低下するという世界でも希な国(経済状況)をつくってしまった。

金だけを目当てに、持てる個人から持たざる者(?)が奪う振り込め詐欺が、犯罪トレンドの中心に居座ったままだ。

数年前、ヒマラヤの小国ブータンから発信された、GNP(国民総生産)ではなく、「国民総幸福指数」の話がニュースになった。幸福度も主観的なものだから、押しつけられるものではない。ただ、幸福を稼いだ金額とイコールだと思えないのは、負け惜しみだけではない大切なものを含んでいたと思う。

しかしブータンも経済成長の兆しが見えると、やせ我慢のような幸福度からこぼれ始めた人が増えたとか。なにより、このニュースに飛びつきたくなる心情が日本社会の世相を表していた。

一億総中流化だと浮かれていた時代があったという間に過去のものになり、今は子どもの貧困が時の話題になっている。

誰もが中流だと浮かれていた頃と比較して、勝ち組と負け組の所得格差拡大が顕著になったのだという報道に、そうなのかと頷いていた。

ところが実態は、その中流全体が落ち込んでいるらしい。つまり圧倒的多数の人が、昔と比べて所得が下がっているという。どうやら中流小市民がやせ細っているらしい。

各国いろいろな事情はあるが、基本的に世界の国々の国民の所帯所得は微増だという。日本だけが、10年前、20年前と比較して下落している。

ところが庶民は不思議なことに、自身の低所得はさておいて、プロスポーツ選手の三年契約五十億円なんてうわさ話が大好きだ。他人の高額年俸を語っていないで、自身の所得が低く、雇用も不安定なことをもって怒り、語ればいいのだが、この話題は日常場面ではたいていタブーだ。

欲張りな大中小資本家は安い労働力確保と、内部留保に様々な企みをこらすのに、庶民は声も上げずに疲弊する。

そして病気に逃げて、なんとか自分の身だけは守ろうとする。セーフティネットも、他国と比較すれば、利用の節度は顕著な国民性なのに、更に不正受給の話題ばかりをメディアが取上げる。弱い者叩きしかやれない世論にメディアが迎合し、誰も幸せにはならない社会が構成されていく。

こんな現状を、個人のプライドが関係していると言う者もあるようだが、この誇りにも怪しいところがある。この翻訳は「誇り」ではなく、「弱者の見栄」とした方が適訳だろう。そして見栄を張るのは、弱虫と相場は決まっている。「武士は食わねど高楊枝」なんて言ったが、その武士は滅びた。

仕事で酷い目に遭わされても、闘えない労働者が多くなったら、雇用側がやり放題になるのは当然だ。権力の横暴や職権乱用に歯止めをかける力は、渦中にある者の賢さ(知恵)の中にある。そこで自分を護るためには、立ち向かう言葉と勇気が必要だ。

しかし言葉を持っていても、それを行使する分岐点に「お金」の問題が立ちはだかると、闘ったことのない者の勇気はすぐにくじかれる。

時には利益や勝ち目があるかどうかだけではなく、理にかなっているかどうかで行動することが、子ども世代の未来を支えることになる。

## 老若対立

上世代の意気地のなさによる崩れは既に起きていると考えるのが妥当な現実がある。新卒大学生の内定率が六割を割ったことが、約10年前の秋には大きなニュースになった。

まだ何も始まっていない若者が、勇んで出発しようというときに、「来てもらわなくて結構！」としか応えない社会って何だろうと思った。

これは、「みんな若い頃には、そんな思いをしながらやってきたのだ…」という話ではない。今、社会の主要部分を担う世代の多くの人たちは、気楽に、当然のように世の中で職を得て、そこから一人前にしてもらってきた。即戦力なんて、誰からも求められなかった。

その人達(10年前の団塊世代管理職)が次世代に向かって、景気の動向を考えるとなかなか厳しいなどと、情けないことを訳知り顔に言っていた。何でもかんでも、経済(景気)の先行き次第だなんて安易に言ってしまうって平気なんて、主体性や責任感のないにも程がある。

中長期計画の立てられない、単年度決算ばかりの社会では、新たなモノが育つ余地などない。

一方、求職する側がこぞって「寄らば大樹の陰！」と合唱してしまうのにも疑問は消えない。本当

に仕事口がない訳ではなかった。中小企業や個人商店のようなどころには、なかなか人が来てくれないと聞いた。

こんな背景にも、先述した上世代の親たちがいる。人は自分に経験のないことは、なかなか他人に勧められない。ましてや我が子。ついつい、念のため、結局世の中は…なんて下世話な世相診断をしてしまう。

若者も親の安心のためと、自身のよく分からない不安解消のために、大手企業の求人にも列を作る。しかしそれでは結局、「世の中は金だ！権力だ！」という考えにひれ伏して、しかも大多数は敗北するだけのことになる。

犯罪とは言い切れないのか、いっこうに進展が感じられない。関西電力の「饅頭・金塊一時預かり事件」など、ばかばかしくて話にならない。シュレッダーの順番待ちで等と言うために東大を出て官僚になったのか！

こんな事をしていると自分たちだけではなく、世の中全体が腐り出す事への責任は感じないのか？

振り込め詐欺が相変わらず後を絶たない。ここに見られるリアリズムの一つは、世代間貧富格差の結果だ。詐欺を容認するつもりはさらさらだが、被害者はおおむね小金を持っていそうな上世代、詐欺師の手先は、貧しい下世代だ。

他の犯罪でも、逮捕された人の属性に「30、40代無職」と書かれているのが目につく。若年層の失業、若者が真っ昼間から街にブラブラしている都市の治安の悪化…なんて、外国映画の背景でさんざん見てきた風景ではないか。そんな街に日本の都市をするつもりなのか？

次世代を犯罪者と予備軍に仕立て上げてしまっているメカニズムは間違っている。定職を斡旋することは、経済対策だけではなく、社会の安定や、未来への希望なのだ。けっして自由競争の結果の自己責任などではない。(そして現在は、人手不足と残業何百時間が話題だ。こんな世間と、自分の人生の時間を重ねてみた

ら、景気やブームに身をゆだねるのが、いかに愚かしいかは分かるだろう。経済はあなたを、自在に使い捨てられる労働力にしか扱わない。専門職と言っても同じだ)

## 無職青年

一〇年ほど前、個人的知り合いの息子の相談を3件受けた。共通していたのは、皆大学卒業の青年。親はいわゆる、中産階級の団塊世代。それぞれ息子の意志を尊重してやりたいと言いながら、先行きの不安を抱えていた。

どの家族も皆、親のあり方として当然のように、学費を使い、息子の将来のことを考えた投資は惜しんでいなかった。私立大学の四年間の学費数百万円、食べさせて寝かせて、通信費も負担してやって、二十四、五歳になっていた。

彼らに共通していたのは、学生時代、アルバイトをほとんどしたことがないことだった。親としても、アルバイトをさせるために、高い学費を払っているわけではないという、もっともな主張があったかもしれない。

親自身は学生時代、必然的に家庭教師やその他のアルバイトをいくつか経験していた。それは家庭の経済的事情ゆえだと思いこんでいた。もしアルバイトなどしなくても良いだけの経済的支えが親からあれば、もっと勉学に集中できたなどと、空想的な思いが頭の中にあっただかもしれない。

しかし残念ながら、拘束されて時間をお金に換えているときが一番充実している人は少なくない。自分自身の才覚だけで時間を充実させるのは、なかなか難しい。

中高年世代は、「日々の生活費を稼ぐことに、あくせくなくて良いほどの金があったら、もっと有意義に時間を過ごせたのに…」と自身の過去の、ありそうもないことを口にするのが好きな生き物なのである。

そして実際、彼らが潤沢に経済支援をしてやった

息子は、アルバイトもなかなか勤まらない青年に育った。

彼らは社会復帰プログラムとして、とりあえずアルバイトからはじめることだって容易ではない。そういう事態が中産階級の小金持ちの周囲で起きている。

## 講演依頼

ずいぶん前のことだが、大阪市内の中学校から講演依頼を受けた。リクエストのあったテーマは「子どもとお金」。さすが大阪の中学校だと感心した。

その頃私は、大阪のラジオ局で月に一度、子育て関連の話題で出演していた。直近の放送の話題もお金が絡んでいた。

「小学校5年生の子どもの母親です。うちは昔から、小遣いは申告性にはしていますが、三番目の息子は全くお小遣いを要求しないのですが・・・」

無駄遣いをしない良いお子さんですねーなどと言って、流しておいてはいけない話だと思った。

大人も子どもも区別のない価格のゲームを、連日のCMであおらないと物が売れないと思いきんだような世の中である。

無駄遣いばかりして、「お金！ お金！」しか言わない子どもも少なくない。そのあげくに援助交際だ、カツアゲだなどととにかく金しかないような風潮にはうんざりだ。

しかし、このお母さんが訴えるお小遣いゼロで平気な少年を、良い子だと言っていていいだろうか？ 欲望はその人が見ている世界の目安だ。欲望の中に成長発達のプロセスも見ることができる。

友達も持っているから自分も欲しい、誰にも侵入されない自分の部屋が欲しい、使い道を報告させられないお小遣いが欲しい、こんな欲求はみな、子どもの成長に深く関わっている。

それがないというのだ。「私なら、定額制にして小遣いを与えると思います」と答えた。そして小学校高学年になったら、使い道のはっきりしない少額の消

費行動が存在する方が普通だと添えた。

お金に家庭的な事情が付きまとうのは仕方のないことである。一律に何年生で何円などと知りたがるのは母親の不安だろう。金遣いの上手、下手は大人にもある。上手になるためには早いうちに失敗もしておかないと、というのも常識である。

## 「現実の生活を考えると・・・」の金

離婚しない母親からの相談を持ちかけられたことがある。夫とはしばらく前から一緒には暮らしていない。夫は同じ地域にある実家で暮らしている。

夫は自営業の跡取り息子だが、父親がまだ現役のため、気楽な息子のままだった。会社で次期社長として、それなりに求められる責任もある中で体調を壊し、軽い鬱病だと診断された。

給料は支払われるし、親が建ててくれた家で暮らす夫婦と子ども二人の四人家族に、大きな支障はなかった。だがこれは、回復の必要のない状態とも言えた。当然のように夫の症状は長引いていた。

子ども達に悪影響があると、まことしやかな心配を口にして夫を責め立てたのは妻だった。息子がクラスメイトとのトラブルが原因で、不登校になったのである。

うるさいことを言われるのが嫌だった夫は実家に一時逃れた。そして数年、本宅に祖父母と夫の三人、別宅に母親と二人の子どもの暮らしが続いている。

相談に来たのはいよいよ問題が深刻になってきたからだ。冷静に考えれば解ることだが、課題含みの状況があるにもかかわらず、何も手を打たないのは問題である。どんな問題かよりも、何もしようとしないことが問題である。

今、母親には生活費が夫名義の口座に会社から振り込まれている。家賃も要らない状態での三人暮らしに、聞かされた額は十分すぎるものだった。

夫の症状に改善はなく、時折奇異な行動に出ることがあると妻は心配する。しかし、こんな状態を続

けていれば、子ども達に良からぬ影響が出るのは明白ではないかと私は話した。

しかし母親はぐずぐずと話をはぐらかすばかりだった。時には離婚の話題も出すのだが、併せて必ず、現実の生活を考えると…と続く。現実が金銭問題だけに絞られていて、他の様々な課題は軽視されたままである。

### 現実

この女性は夫の大学の同級生で、高学歴の専業主婦である。彼女の語る現実的判断は息子を腐らせ、夫の回復にも何の力も発揮していない。

離婚しないのなら、4人で家を出て、今後の自分たちの生活設計をし、子ども達にもその意図を伝えたら、みんなが元気になる可能性はあると思う。しかし彼女は、既得権を手放したくない。手に入れているモノより、失っているモノの方が多いではないか！と叫ぶのは私の価値観だと思っているらしい。

彼女が現生活を維持するお金のために、どこまで譲ってしまうのか、私には見当がつかない。お金が大事だということに異論はない。でも他にも大切なモノはたくさんあるし、時には、正しく天秤にかける仕事もしなければならぬのではないかと思う。

### 金の使い道

賛否両論あると思うが、こんな話を耳にした。あるケアマネジャーが担当している人の話だそう。

月に一度、訪問することになっている七〇代の男性。50歳で事故にあい、下半身不随になり、それ以来車椅子生活。他に障害があるわけではないが、65歳以上なので介護保険対象になるのだそう。

この男性にアジア人女性の妻がある。一〇年近い婚姻歴だそうで、彼は初婚。当然、二人の間に子どもはない。

妻はまったく日本語の話せない状態で来日。そして結婚。現在四〇代半ばの彼女は、アルバイトをしていて、賃金の一部は母国で結婚していた時に生んだ子のために仕送りしているそう。

担当のケアマネジャーは初めて事情を聞いた時、金目当ての外国人女性に騙されているのではないかと思ったそう。

しかし彼はケアマネのそんな疑念に対して、「自分がいよいよ要介護状態になった時には、施設の世話になりたいと思っている。妻に介護してもらおうとは思っていない」、「妻はその時には、出て行けば良いのだ」と言う。

彼の言い分はこうだ。「私はずっと結婚したいと思っていた。しかし縁のないまま四十歳も過ぎて、年老いた両親を抱えた自分のところに嫁に来てくれる人はなかった。そのまま五十歳で自分が車椅子生活になり、両親も相次いで亡くなった。こんな自分を承知で結婚してくれる日本人女性が居るとは思えなかった。

妻のことは、障害を持ちながらアジア人女性と結婚した知人から斡旋業者を紹介してもらって知ることになった。妻は自分の稼いだ給料はしっかり貯蓄している。自分よりもずっと若いし、母国には子どももある。私はこれでありがたかったと思っている」と語ったそう。

この話を聞きながら私は、昔マンガに描いたある人のお金の使い道のことを思い出した。



鈴子さんは療育手帳Bをもった五〇才の一人暮らし。年金と生活保護費で慎ましく暮らしていた



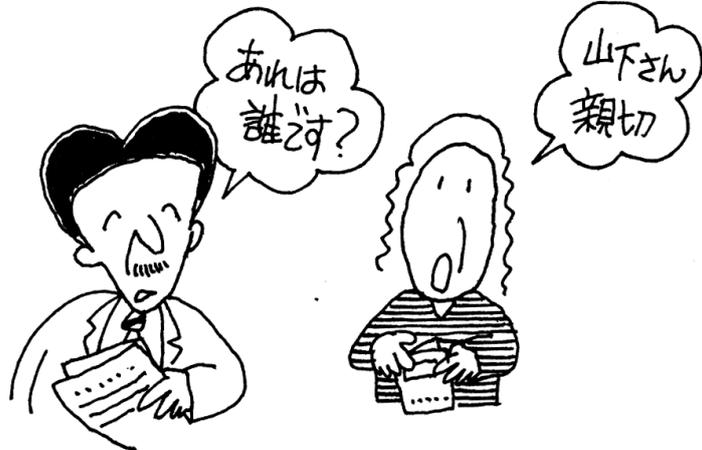
とくに問題を起こすでもない、平穏な町営住宅での毎日だった



鈴子さんのことが話題になったのは、手帳の更新時期が来たことをしらせに、福祉事務所の担当が家庭訪問したことがきっかけだった



先客があった。何かの営業の人らしく、鈴子さんも親しげだった。ケースワーカーの顔を見ると、あいさつをして帰っていった



鈴子さんが引きだしにしま  
いかけた書類が気になった  
ので



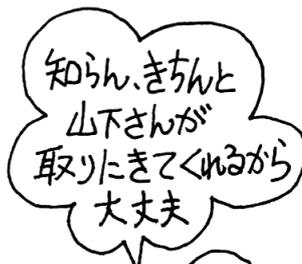
何かの月々の支払い受取の  
書類だった。そこには先程  
の「山下」さんの印が毎月  
押されていた



そういつて鈴子さんが見せ  
てくれたのは、金色のシン  
プルなリングだった



購入した鈴子さんのところ  
に、「山下」なる人物は毎  
月集金に来ているらしい



事務所に戻ったケースワ  
ーカーは、上司に相談した



翌日、上司と二人で訪れた  
ケースワーカーは、指輪以  
外にも、数点、大事にしま  
いこまれているアクセサリ  
ーを見せられた



支払いの帳面をみると、数  
年にわたって山下なる人物  
に毎月支払い続けているこ  
とがわかった



「いつ使うの？」と聞くと  
首を振る



一度も使用したことはない  
そうだ



問題だと考えた上司と共  
に、預かって帰った書類に  
記載された会社に電話をし  
た



会社は最終的に折れた。未  
使用のアクセサリーも買い  
取りに応じた

別に不正なことや  
押し流しはわけじゃ  
ありません  
けど...



鈴子さんの無意味に思える  
支払いはなくなった



もともと静かに暮らしていた人だから、この件が片付くと誰も尋ねてこなくなった。月に一度、山下さんがきて雑談していく以外、来客は皆無だったのだ

この話を聞かされた時、「自己決定—自己責任」のことが浮かんだ

鈴子さんはこれで本当に良かったのだろうか



他人から見ると意味がなさそうなことに、自分の意志でお金を使う人は少なくない



彼女のお金が有効に使われるよう配慮したのが悪いわけではない

しかし、月に一度訪ねてくれる山下さんとあれこれ話すのが鈴子さんの楽しみだったとしたら、その為の支払いでかまわなかったのだとしたら……



どうして障害があることを理由に、無駄遣いを制限されなければならないのか？ 無駄遣いする権利も個人に属しているのではないのか？ そんなことが思われてならなかった

お金には間違いなく力がある。だから可能だったという遣いみちもあるに違いない。他人の用途について安易に、正しいとか間違っているとか言えない。

それほどの不自由もなく暮らす人が、ためらいなく語る正しさや権利は、字句は同じでも、様々な事情を抱えて生きる人の口にするそれとは、含まれるものが随分異なるのだろう。

マンガに描いたケースワーカーはけっして悪い人ではない。役所も正しいことをしたと思っているだろう。だから誰も何も言わない。

確かに私が知的障害者の相談機関に勤務していた時にも、彼らの障害者年金を狙った詐欺事件があった。当時、遡及支給でまとまった額が一度に支払われるケースが多くあった。それを狙って結婚した夫と称する人が、窓口で大声を上げたことなどがあつた。

また、サラ金でお金を借りさせられ、覚えのない負債を抱えた人もいた。だまされないように用心してあげるのも、ソーシャルワーカーの仕事の一つだった。

しかし、鈴子さんの暮らしは、その後も続いて、いずれ終わる。その時を、充たされた思いで迎えられるかどうか、この援助者のジャッジはそれほど貢献しないのではないかと思った。

お金は使い次第で、様々なことが起こせるものでもある。凡人がお金の力を上手に使うのは、なかなか難しい。

私は最近、「お金は投票用紙だ」と誰かがどこ

かで書いていたことを、よく思い出す。何に一票入れるか、その意思表示が消費だと考えると、単に欲求充足行動として、買う、買わないを決めたり、お金がある、ないだけで消費を考えているより確かな気がする。

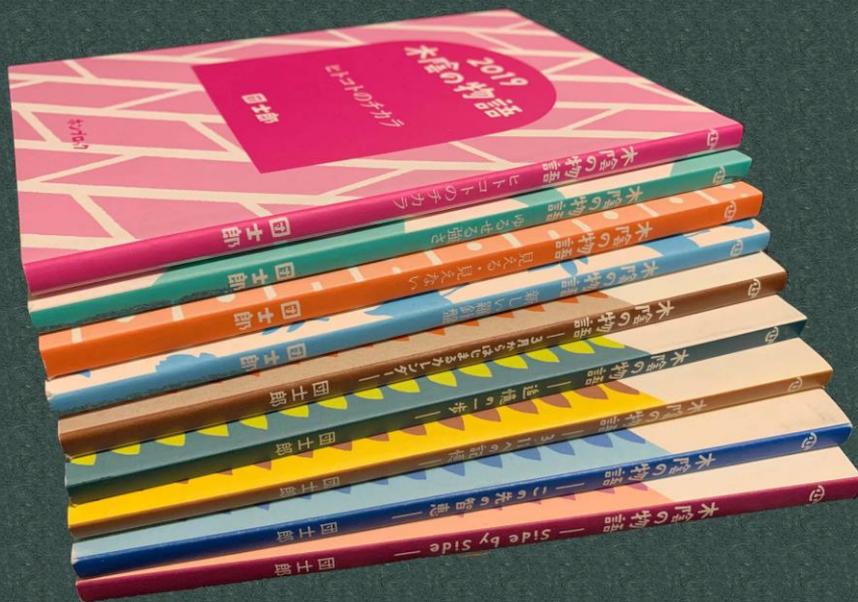
車椅子の男性も、鈴子さんも、自分が良いと思うモノに一票投じていたのではないか。それは投票権を持つ人の自由なのではないだろうか。

第三者の言う無駄遣いを慎んで、大切にしてお金を残して死ぬのが、それほど賢いことだとは思えない。基本的に消費は個人に任されたものだし、意志的(主観的)に浪費するのは娯楽なのだと思う。

客観的に値打ちのあるモノに投資して、死んでもからも更に、引き継いだ人が資産運用するなんて、資産の側から見れば賢いことなのだろう。でも、亡くなった人より、残された資産に皆の関心が向いて、奪い合いになったりするの、それほど優れたことか、と私は思う。

# 手渡し文庫版「木陰の物語」

東日本大震災復興支援プロジェクトの10年  
2011～2020



団士郎

2020年1月から、こんなモノを制作していました。詳細は次号で報告します。